

「打ち合わせをしているのだろう。済むまで向こうの土砂溜まりで待っている」

たえは、焦りながらも「もう、終わった」と答えたが権左の反応は違った。

「その人の衆は終わっていないと顔に書いてあるぞ、終わるまで待っている」

そういうと、ふり返り手を挙げて立ち去っていった。

たえは、矢継ぎ早に打ち合わせを終わらせると人足頭を解散させた。無理矢理といった感であった。人足頭たちは、走り去るたえの後ろ姿を嘔然と見送るしかなかった。

石積を駆け下り、息を切らせて土砂溜まりまで走る。話したいことが山ほどある。相談したいことも

山ほどある。教えてほしいことも抱えきれないほどある。

大きな石が運ばれて野積みになっている広大な場所で、たえは吹き出す汗を拭こうともせず権左を探した。

そこには、一番大きな石に腰かけ、遠くを眺めている権左がいた。

たえは、駆け寄り優しく権左の背中に抱きついた。

話したいことも相談したいことも全て頭から消えていた。権左は背中に冷たいものを感じ、それがたえの涙と気づいたが、振り向きもしなかった。

「たえ、大きゆうなつたな」

権左の声と同時に嗚咽が背中から聞こえる。二人は暫くそのまま動かなかった。

権左は、たえと彦輔が箸蔵村を出た日に、彦輔が置いた手紙を学のある村の長老に呼んでもらったらしい。それには感謝の言葉と、必ず、たえの仕事ぶりを見に来てくれと書かれてあったのだ。

権左が彦輔に会いたいというので、この足で彦輔の家を訪ねることにした。たえも久しぶりである。

二人が家を訪れると、彦輔は飛び上がるほどの喜びようで二人を迎えた。

権左を座敷に座らせると、息が切れるほどの早口でたえの働きぶりを伝えた。その話を一つひとつ

頷きながら聞き、話が途切れるたびに権左がたえの顔を見る。

「彦輔さん、あんたに一つ謝らねばならんことがあ

る。最初に会ったとき、お前にできるような仕事でないというたが、あれはわしの間違いじゃ。つまり見立て違いじゃった。悪かったのお。たえがここまで一人前に仕事ができとるのは、あんたのおかげじゃ。わしからも礼をいう、ありがとう」

その顔はもう師匠ではなく、父親そのものだった。彦輔と権左はお互いにたくさん話をした。

横に座って話を聞いていたたえは、お久米さんの家が池に沈むと知って自信を喪失していた時に後藤芝山先生からかけてもらった言葉を思い出していた。

——人の心動かずして事は動かぬ。また、おのれも同じ——

その意味が、今のたえには十分理解できる。肩に力がはいって笑顔がつかれず、負け惜しみをいつていた昔のたえではない。今は父の顔を優しい笑顔で見ている。

夜も更けて、二人が家を出ようとした頃から、久しぶりに雨が降り出した。彦輔が傘を二本差し出すと、

「一本でいいよ」とたえは一本返した。

一つの傘に寄り添い帰る後ろ姿は、本当の親子以上の絆で結ばれているように感じた。

次の日の明け方になると雨は豪雨となった。季節はずれの暴風雨が地域を飲み込んでいく。彦輔の家でも吹き込む雨をしのぐために父が戸板を各所に打

ち付けた。家の前の道は川のように水が流れている。

彦輔は急に工事現場が心配になり、父に高木村に行つてくると告げ、蓑笠で身を包み家を飛び出した。

夜明け直前の薄暗い道を川沿いに走る。いつも渡る沈下橋はすでに濁流の下だ。危険は覚悟していた。

これほどの大水が出るということは、たえも池の堤を守っていることだろう。自分が行ったところで何の手伝いもできないかもしれないが、心配でいたたまれなかった。

工事現場に着いた頃には、あたりは、すっかり明るくなっていた。しかし、雨の勢いは増すばかりだ。神五郎池の堤の上には高木村と新田村の

男衆が立って水面を眺めている。池の水面は溢れんばかりに上昇して、堤を越えるのは時間の問題だと感じた。

そこにいる男衆にたえさんはどこにいるのかと尋ねると、池の一番弱い部分で堤を守っているといる。雨と風に逆らって思わず駆け出した。たえに危険が迫っているのは間違いなさそうだ。まして堤が切れて濁流に巻き込まれれば助かる見込みは皆無である。その危険な場所から早く離れるよう伝えなければと思った。

その場所では数人の男が土袋を運んでいた。その中で土袋を抱えたたえを発見する。

「たえさん、大丈夫ですか」

「おう、彦輔、わざわざ来てくれたのか、すでにゆるは全開じゃ。池の水は抜けているから雨が静まるのを待つしかない」

「そんなことより、ここは危険ですから早く離れないと」
雨と風の音に負けぬように大声で伝える。

「このような大雨は何度も経験した。大丈夫じゃ。ここさえ守れば池は壊れん」

そういつても、雨の勢いは衰えるばかりか益々激しくなり、池の水面も限界である。

彦輔も男衆に加わり、土袋を運ぶ。何度も足を滑らせそうになるが、その度に男衆が助けてくれた。

そこへ、池を見回っていた高屋の権左が小走りで帰

つてきた。

「たえ、堰堤が切れるかもしれん。村の反対側の堤を人の手で切るぞ。今ならまだ間に合う、急げ！」

堰堤はゆるが設置されている部分。これが切れば水は一気に村を襲い、大惨事となることは間違いない。

権左は堤が切れても村に影響のない場所を瞬時に見抜いていた。村に届かぬ流れを人工的につくるようだ。

そこにいた全ての者が権左の指示する場所へ向って急いで移動する。村の反対側の斜面である。

「たえ、百姓の土地を流してはならん。ここなら、村を避けて川に流れるはずじゃ、今すぐここを崩せ」
権左が全員に指示を出す。

方向に走り出した。

「父さん、危険じゃ、私も行く！」

その悲痛な叫びに振り返った権左は、にっこり笑った。

「ここは、おまんの持ち場じゃろ、おまんならできはずじゃ、ええな」

そう言い残すと、暴風雨が吹き荒れる堤の上を走り去った。

権左の姿を見たのはそれが最後だった。

雨が止み、権左の指示で自ら切った堤のおかげで村は守られた。

大雨の爪あとはすざましいもので、近隣の村では橋が流され、がけ崩れで埋った家、流された家もある。

「父さん、みず道じゃ」

たえが指さす方向を見ると、堤の外側、中腹から水が小さく噴き出している。堤が古くなつて土のひび割れから出ているようだ。

「よし、そこじゃ、みんなでそこを崩せ」

男衆が、その場所に駆け寄ろうとした時、遠くから叫ぶ声が聞こえる。

「堤が切れるぞ、早よ、逃げる！」

雨の勢いは衰えない。荒れ狂う風は小枝を吹き飛ばし、大木をなぎ倒す。水路という水路は全て溢れかえり、場所もわからなくなっている。

「ここを早よ崩せ、ここを切ったら、他は切れん」

権左は鬼気迫る指示を出すと同時に声が聞こえた

つた。大災害である。

たえと彦輔は権左の姿を必死に探した。村の人々も手分けして探したが見つからない。たえは泣

きじやくりながら父の名を呼び続けた。村の衆も七日間かけて探しまわったが、遺体はおろか着物の切れ端すらみつからなかった。

搜索が打ち切られた後も彦輔だけは諦めず川沿

いから下流の村まで探した。高木村を守った英雄なのだ。その上、彦輔には返しきれないほどの恩義がある。どうしても生きていてほしかった。

たえは、近隣村の惨状を目の当たりに見て権左の偉大さを確信した。もし、あの時、あの指示がなければ、高木村も同じ姿であつたに違いない。

なみだ か は
涙も枯れ果てているたえは、必死に探す彦輔の
すがた み ふさ
姿を見て、塞ぎがちにも、ふっきれた表情に変わ
っていた。

「もう良い。すまぬ」

どろ
泥まみれになって捜索する彦輔を止めた。

「父は、死んではおらぬ。今もどこかで、池の堤を
しゅうぜん
修繕しているだろう。心配しなくても大丈夫じゃ。

たかや ごんざ たかぎむら まも
高屋の権左は高木村を守った、それが百姓の土地
を守るといった父の望みであったのだから」

はしくらむら ごんざ みず おぞ
箸蔵村で権左が、水の恐ろしさがその村にはわか
っていないといった言葉を思い出していた。今、始め

てその言葉の重みを理解した。その夜の出来事は、
しんでんむら たみ こころ
新田村の民も心から感じたに違いない。